叢書
死の文化
15

死なれて・死なせて

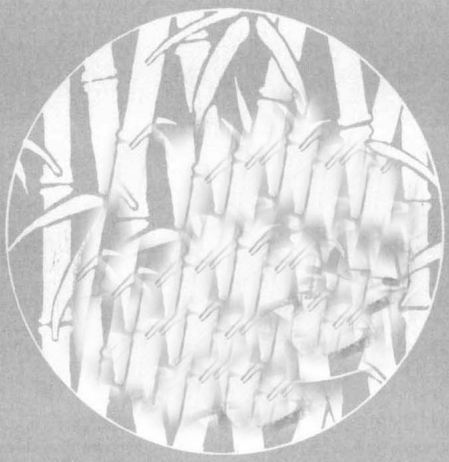
秦恒平

弘文堂

15

死なれて・死なせて

秦 恒平



弘文堂

著者紹介

秦　恒平（はた こうへい）

1935年京都市生まれ。1958年同志社大学文学部卒。1969年小説『清経入水』により第5回太宰治賞を受ける。

現在　作家・東京工業大学教授

専攻　小説・日本文化論

小説　『みごもりの湖』（新潮社）、『冬祭り』（講談社）、『北の時代』『親指のマリア』『慈子』『修羅』（以上、筑摩書房）、『墨牡丹』（集英社）、『閨秀』（中央公論社）ほか。

評論　『谷崎潤一郎』『花と風』『からだ言葉の本』（以上、筑摩書房）、『中世と中世人』『一文字日本史』（以上、平凡社）、『女文化の終焉』（美術出版社）、『趣向と自然』（古川書房）、『梁塵秘抄』『閑吟集』（以上、日本放送出版協会）ほか。

他に　私版「秦恒平・湖（うみ）の本」シリーズを継続刊行中。

死なれて・死なせて〔叢書 死の文化 15〕

平成4年3月20日　初版1刷発行

©著者　秦　恒平

発行者　鯉淵年祐

株式会社 弘文堂

101 東京都千代田区神田駿河台1の7
TEL 03（3294）4801
振替 東京2-53909

ISBN4-335-95027-6
Printed in Japan

印刷・図書印刷
製本・井上製本所

「死」という観念的な名詞にも、「死体」という即物的な名詞にも、この本では、あまり立ちどまるまい。それよりも、この二つの名詞のちょうど間に、あたかも生ける者のように佇んでいる「死者」に目をむけ、また目をむけている「生者」のことを、より多く深く考えてみたいと思う。もうすこし関連づけていうならば、死者に「死なれた」生者について、さらには死者を「死なせた」生者について、考えてみたいのである。

「死」という文字や言葉に出会わぬ日はない。「死体」こそめったに目にしないが、時にはテレビの映像などになまなましく死んだ・殺された死体のありようを見せつけられる。鳥・獣の例が多いとはいえ、まれには銃に撃たれ、戦車に轢かれ、縄に吊るされて死んでいる人間も写しだされてくる。大方は遠い海外からの映像だが、交通事故死ともなれば、現場に居合わせるかどうかの違いだけで、もはや、だれもかもがそれに慣れ過ぎるほど日常的に慣れてしまっている。人が「死んだ」という事実は、もはや、ただの情報に過ぎな

いかと思われるほど、聞いた次の瞬間には半ば忘れられようとさえしている。こんな指摘自体がもうどれほど陳腐になってしまっていることか。

たしかに、その陳腐さ自体が一面の真実であり、時代の、ないし社会の、さらには現在を生きている人の心ざまを、ある意味で「説明」しえている。

だが、そんな乾ききった態度ばかりが「死者」を遇しているわけでも、ない。わかりきった話になるが、その死者が遠い、ないし遠い遠いよその世間の人であれば、人はむしろ軽い安堵をさえ身に抱いてさっさとそんな「死」を忘れ「死体」からも目を背けて忘れてしまうけれども、たとえばその死者が、かりにアカの他人であっても何らか関係があったり知っている人であってみれば、同じ交通事故死であれ病死であれ、すこしは身を乗りだし聞き耳をたて、その死に関心を抱かずにはおれなくなる。まして家族親族はおろか親友や恋人のように、己が身内に刻まれてごく親しい、ないしごくごく親しい者が死んだとなれば、人はその「死者」への思いに烈しく心乱されずにはすまないだろう。

私は、だがこの本を、こういう、すこし固い語り口で装うことをなるべく避けたいと思う。目前のこれは、率直に、正直に書かれたほうがいいにきまっている痛切な主題である。われわれ凡人はなどという謙辞はつかわない、ふつう一般の人は、すこしの傷む心ももたずに、親しい、また愛している人の死を、目前に死なれ、ないし昨今に死なれた受け身を、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

思いも話しも出来るものでない。すこしばかり固い語り口になったにしても、それも自傷のいたみを懸命に堪えるためであろうが、私の願いは、この本をただ著者から与えられて読者は読むといっただけのものでは、無く、あらせたいのである。めいめいに自身の胸に抱いている、そしていつか抱かずには済まない、また抱かせずにも済ませえない「死なれる」という受け身や「死なせる」という加害の「痛苦」の意味を、めいめいに、しかも一緒に、考えてみたいのである。生きて克服するしかない「哀しみ・苦しみ」であればこそ、負けてしまうわけにいかない「たたかい」であればこそ、である。

感傷的に話そうとは、むろん、思わない。それより、率直にと心がけたい。他者のそれを代って述べる・代弁することの可能な「哀しみ」でも「苦しみ」でもない。自身で語るしかない。恥ずかしい隠しておきたいようなことも、だから、率直に言おうと思う。ある意味でこれは自伝のようなものとなり、また遺書ともなろうからである。

第一章

ごく最近のことである、ある英語教育の大きな団体に頼まれて『竹取物語』を私自身の言葉でラジオ劇ふうに書きかえる仕事をした。よくいう現代語訳では、ない。児童が英語で演じられるいわば「英語劇」のための対訳台本なのだが、日本語の原稿も文学作品として楽しめるものにしてほしいと、四本の録音テープに均等に場面割りをしたり、分量を原作の七割ほどにおさえて話は端折らずにとか、なかなかむずかしい注文であった。

和・英語での、ベテラン演劇人たちによる吹き込みテープも、美しい対訳絵本『なよたけの・かぐやひめ』（ラボ教育センター刊）も、だが、りっぱに出来た。私も少々がんばった。そんな委細はぜんぶ措くとして、さて、『竹取物語』をとそもそも依頼された最初、やや私は受け身であった。おなじ古典でもほかのが選べないのかナ、という気分であった。ちいさい頃から「かぐやひめ」のはなしが、なんとなし苦手で、苦手なわけは言うまでもない、年よりの親がうら若いいとおしい娘に「死なれて」しまう物語だからだ。天女の昇

天などという美化とは、およそかけ離れた切なさを私は感じていた。

『竹取物語』はわずか五十枚余の短編だが、「ものがたりの、出で来はじめの祖（おや）」といわれ、その背景は地球規模のひろがりさえもった、一筋縄でいかないたいへん含み豊かな物語なのである。世界的に分布している白鳥処女説話の、そのうちでも主筋は羽衣説話に根ざしながら、長者説話の性格も濃厚にもっている。それでいて五人の求婚者への五つの難題や時の帝とかぐやひめとのしたたかな応接などを介して、成立当時の「現代」作品たる骨格も主張も表現もを兼ねそなえ、二十一世紀にまぢかい「現代」の感覚ともけっしてかけ離れていない。しきりに映像化されたり絵画化・音声化されたりしていることでも、それは分かる。日本の子だけでなく世界の人々にも魅力ある「再話」をと、英語教育の団体が頼んで来たというのも一証拠であり、つまり、只のおとぎ話ではないのである。完成された文芸作品に仕上がっていて、しかも、作者である知識豊かなおそらくは中下級貴族または知識人の同時代になげかけた批判や風刺には、まこと厳しいものがある。短編物語にしては研究論文もびっくりするほど豊富に積みあげられている。

それにもかかわらず、私は、『竹取物語』の真の動機には、作者である誰かしらが、真実いとおしい幼い者と、「死なれた」か「死なせた」か、いずれにせよ本意なく死別したごくプライベートな哀しみ・苦しみがあったものと読まずにはおれなかった。それが子供

ごころにも第一感であった。第一印象だった。その直感、その印象のまえには、作者の学殖ゆたかな説話的創作欲も、欣求浄土の仏教的主張も、また九世紀末貴族社会への憤懣や風刺も、みな、やや添えものめいて想われたのである。

死別の予感。人間がもつ予感のなかで、それは、もっとも無力感にさいなまれるものである。しばらく私の「かぐやひめ」最終場面に目をむけてほしい。

三年という月日がたち、国の帝となよたけのかぐやひめとは、文をかわし、歌を詠みかわして、ほのかな愛とたがいの敬意とを伝えあっていた。

そしてその年の春はじめから、ともすると、かぐやひめは月の出美しく晴れやかな宵にかぎり、かえって、心しおれた様子をおきなやうばに見せていた。

——どうしたことか、あんな姫を見たことがない……。

——お月さまの顔を、そんなにごらんになるもので、ない。縁起がわるいといいますよと、何度もいうてみるのですが…。

——今宵も、ほら、ああして七月十五夜の月かげを浴びて……。

——あの顔いろの、こわいように輝いて。でも、寂しそうな…

と、うばも涙がおに。

――ただごとでは、ない。行って、なにか、胸にあることを聴いてやらねば。

――なに不自由ない幸せなこの世にいて、……ね、かぐやひめ、どうなさいました。悲しいことでもあるのなら、わたしたちには隠さずに…。

――いいえ、いいえ、なにも……。月を見ていますと、ただ、こころ細うものあわれな気持ちになりますの、それだけのこと…。

――お若い美しい人が、世の中を心細いなどと……。

――お月さまを眺めるの、およしなさい。月を見ればきっとこうなのですから……。

かぐやひめは涙をうかべ、

――でもどうして月を眺めないでいられましょう、

と、夕方までは何事もなく、月の出ともなれば誘われでて、声を忍んで泣いてさえいた。

予感は「死ぬ」者にもある、ふかい諦念に催されて。しかし「死なれる」者は、胸をかきむしるほどの焦慮にくるしむ。

八月十五夜の月がちかづき、姫は、もう人目もかくさず泣いて、おきなとうばとに、すがりついて打ち明けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――わたくしは月の都の人ですの。ふしぎのはからいでこの国に生まれ、これまで育てていただきましたが、いつと定めの時が満ちて、やがて八月満月の夜、月世界からわたくしを迎えの者らがまいりますと、おいとまをいただくほかはございませんの。悲しいお顔を見るのがつらくて、この春このかた月を眺め、お別れの夜のちかづきますのを、泣いて嘆いてご心配を重ね重ねの親不孝…、どうぞ、ゆるしてくださいまし……。

――何という…。竹の中からおきなが見つけたかぐやひめを、だれが連れ去っていいものか、許しはせぬ。

――そんなことになれば、生きてはいません、このうばも。

――月世界では僅かの間も、この国では久しい歳月。月の国から別れてきた実の親たちのお顔ももう思いだせませぬほど、お二方のお慈しみをこの国ではうけてきました。帰って行くうれしさより、おいとませねばなりませぬ悲しみ…、それが日ましにせつなくて。でもどうにもならない定めですの。

泣いて嘆いておきなもうばも、心くずおれ身もおとろえ、帝の前へ願って出た。

――わたくしどもの屋敷からかぐやひめの輝く光が消えうせるなど、夢にもあってはなりませぬ。帝の大きなお力添えで、今にも迎えの十五夜の月の都の使者たちを、どうか追い返してくださいませ。

――ただ一と目逢うたかぐやひめだが、あの照りはえて美しい姫をうしなうなど、想いもよらぬ。国王の力を尽くして月の使いは防いでみせよう。

「国王」を「国手」とでも読みかえれば、祈る思いですがりついて、ただ「死なれ」まいと地上の権威の名医の手に、娘をあずける親たちの嘆き恐れが伝わってくる。帝は二千人の兵を翁の家におくり鉄壁の護りをかためるのだが、すべて空しい。

宵すぎて夜もふけて、竹取のおきなの家は、ひしめく護りの人びとの毛穴も見えるほど月明かりをあび、照り輝いた。そして、あぁ…と、地上の者みなが息をのんだ。

大空より、雲にのっておりてきた人が兵士らの身の丈ほどの宙にあまた居ならび、だが、だれもものに打たれた心地して、闘おうという気も弓を引く気も萎えていた。ただもう天人の姿に見惚れていた。月よりの使者は翔ぶ車を牽いていた。装いの麗しいことも夢のようであった。

雲上菩薩らの来迎引摂（らいごういんじょう）の光景をまぼろしに見立てるのも、そう見当はずれではない。しかし竹取の翁も姥も「さ、かぐやひめを、ここへ」とうながされ、必死にあらがう。

「いいえ、いいえ。お人ちがいでございましょう」「ここにおいでのかぐやひめは、重いご病気。出ておいでにはなれません」と。もとより甲斐もない。たちまち鎖された戸という戸はことごとく開き、かぐやひめはすべるように姥の抱く手を放れ、月明にかがやく美しい姿を見せた。

――悲しくても帰って行くしかない、わたくし。せめて見送ってくださいまし。

――別れるも見送るも……できますものか、見捨てておいでになるものを……。

――どうして、連れて行くとおっしゃってはくださいませんの。

――泣かないでそのように、お二方。この国に生まれた身であれば、いついつまでもおそばにお仕えいたしましたものを。こうお別れを急ぎますのも、願ってすることではございません。この脱いで参りますわたくしの着物を、形見と、どうぞご覧くださって……、そして月の美しい夜はどうぞ眺めてくださいまし。あぁ、それと知ったなら、お二方の恋しさにあの夜空から落ちて参りそうな気がいたします。

おきなもうばも茫然と、そして声を放って泣き、惑い、なすすべもない。

かぐやひめは不死の薬を文に添えて、今宵勅使の中将に、帝をうやまう胸のうちをや

さしく託した。

――かぐやひめ。

――いとしいお子……。

――おとうさま、おかあさま……さようなら…おたいせつに。

天人はつと近寄って羽衣をそっと姫に着せた。人と育ったかぐやひめは、たちまち輝く天女となり、この人の世の情けとは遠いはるかな光となって、空翔ぶ車の翔ぶように、大勢の天人に護られながら静かに天に帰って行った。

――命を惜しいと思ったのも、あの、姫がいてこそ……。

――だれのために生きてきた命でしょう。みな、かぐやひめのためでしたのに。

見送るおきなもうばも、血の涙を流して、狂うばかり。

兵士を率いて勅使の中将は帝のもとへ帰り、かぐやひめを引き止められなかった成り行きを、こまごまと申しあげた。不死の薬の壺にそえ、かぐやひめの文もご覧に入れた。

これが死に目にあうということでなくて何であるか、最愛の人に「死なれる」ということでなくて、何であろうか。美しければ美しいで、私は、ここのところを読むがいやさに『竹取物語』を苦手にしてきた。まして自分のことばで書き直すなんて。それにしても辞

世の歌もふくめて遺書といい形見といい死に装束といい、遺漏なくはなはだ象徴的に書き込まれてある。あまり人は言わないけれども、この場面はのちのいわゆる「往生伝」の先駆的な文芸表現と言いきってもいいだろう。地の文を鈴木瑞穂が読み、翁を今福将雄が、姥を大塚道子がつきあって、清楚無類の野口早苗が演じたかぐやひめ昇天のこの場面を、効果音ゆたかにテープで聞いた人達は、おおかた涙を目にためて堪えきれぬようであった。「死なれ」「死なせ」てそれに耐えねばならぬ日の、まこと不定のはかない思いが聴く耳と心とを容易にとらえたのであり、原作のつよい動機におもわず衝き動かされたのだ。私はそう感じた。

いわば以上は肉親の悲哀になぞらえて読めるが、物語をむすぶ帝の悲哀にも目をそらすことはできない。

帝は、悲しさに負けてお食事もなさらず、音楽の遊びなども禁じられた。そしてある日、大臣や高官をお側に呼ばれて、お尋ねになった。

——天にいちばん近い山は、どこの山であろうか。

——駿河の国にあるという山が、この都からも、天へも、近うございましょう。

帝はことばもなく、やがて、こんな歌をくちずさんでから、お命じになった。

逢ふことも　な(無)みだに浮かぶわが身には　死なぬ薬も何にかはせむ……。

――不死の薬もかぐやひめの文も、いまはただ涙の種。天に近いと聞く駿河の山の頂きに運んで、火と燃やしてまいれ。その山を「ふじの山」と名づけよ。心の誠を、焼く煙にそえ天上の人に伝えよう。

そしてこの物語を「なよたけの、かぐやひめの物語」と、幾久しく語りつごう…と。

この帝の態度には明らかに葬送と追悼との哀情が簡潔にあらわれている。悲哀を克服し、不死よりもむしろ来世の逢いを天上・浄土にまつ願いが隠されている。へたに仏教臭を表立てず、「死なれた」者から「死んだ」者への愛情が的確にあらわされている。そして物語は告げている、「死なれた」者は悲しいと。しかし哀しんでばかりはいられないと。そのとおりなのである。けれど悲しく苦しいのである、「死なれ」てしまうのは。

この物語の告げているところでは、かぐやひめは、天上世界でのある障りにより、また竹取りの翁が身におうた因縁によって地上の竹のなかにおろされ翁と姥とに育てられた。障りが失せたので天にあげられた。物語はそう書かれている。かぐやひめは死んだわけではないのだと。それは、しかし、地上の者の知るよしもないこと、人間有情の思いにはかぐやひめは死んだのである。だが死ぬにいたる病については書かれていない。むしろ、人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com